

第2回 家康公検定副読本

「家康公と偉業を支えた人々」

～家臣団を中心に～



～生誕の岡崎、出世の浜松、大御所の静岡～



家康公
四百年祭

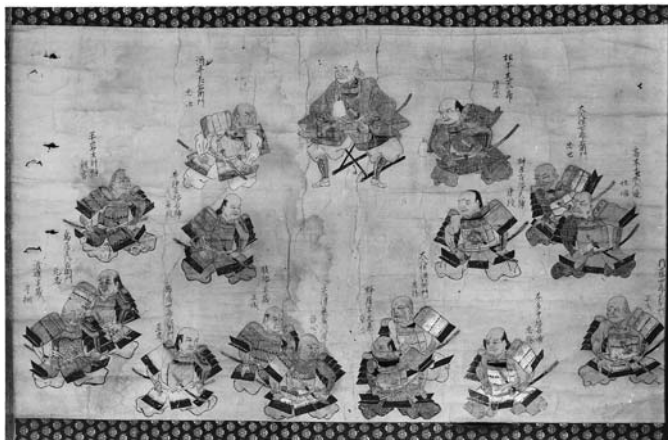
■編集 / おかざき塾

■発行 / 岡崎市・浜松市・静岡市・岡崎商工会議所・
浜松商工会議所・静岡商工会議所

第2回「家康公検定」副読本

家康公と偉業を支えた人々

～家臣団を中心に～



十六神将図
(法蔵寺蔵／岡崎市美術博物館提供)

平成26年度版

<正誤表>

2014.8.22

P 4～5 一目でわかる家康公の生涯「2. 自立期/平和社会へのまなざし」永禄9年の欄
誤) 従四位下 → 正) 従五位下

P 2 3 関東に配された有力家臣たち 右欄 白井 家臣名
誤) 本多康重 → 正) 本多康重・広孝

P 2 3 関東に配された有力家臣たち 右欄 小幡 家臣名
誤) 奥平信貞 → 正) 奥平信昌

P 2 3 関東に配された有力家臣たち 右欄 本多正信 地名
誤) 甘縄 → 正) 甘縄 (玉縄)

P 2 5 右の人物紹介欄 松平忠吉
誤) 名古屋城 → 正) 清洲城

人物名 誤) 大久保忠隣 → 正) 大久保忠隣
※大久保忠隣 (ただちか) の最後の文字「隣」を
「隣」に修正 (4カ所)
※該当箇所 P 1 7 右側人物紹介欄 下から9行目
P 2 6 本文14行目および
右側人物紹介欄 下から8行目
P 2 8 右側人物紹介欄 上から6行目

平和社会実現の偉業を支えた人々

竹千代が駿府で今川氏の人質として過ごしていたときの逸話です。戦国の世の武士たちは鷹狩を楽しみ、立派な鷹を持つことがそのステータスになっていました。幼い竹千代も鷹を飼いたいと強く思っていたようですが、人質の身でもあり、叶わぬ夢だったのです。そんな折、竹千代より3歳年長で、近習として仕えていた鳥居元忠に、「百舌鳥を鷹のようにせよ」と命じたのです。元忠は律義にも承知したのですが、とても無理なことでした。しばらく経ったある日、竹千代は百舌鳥が鷹のようにないことに怒り、元忠を縁側から蹴落としたのです。傍にいた家臣たちは竹千代を大いに諫めましたが、岡崎でそのことを聞いた元忠の父・鳥居忠吉は「それでこそ、この乱世を勝ち抜く大将の器」と褒めたと言います。その後、元忠を呼び、「お前はこの主君に忠義を尽くせ。何があっても最後までしっかりと仕えよ」と言い含めました。元忠は父の言葉通り、生涯家康公の



徳川二十将図
(東京国立博物館蔵)

側近として忠義を尽くし、関ヶ原の合戦の前哨戦でもあった伏見城の戦いで、数万人にも及ぶ西軍に囲まれながらも、松平家忠や内藤家長らとわずかな兵で最後まで戦い抜き、討ち死にしたのです。

家康公が乱世を統一し、平和社会の実現に力を尽くせたのも、この元忠のような忠義に厚い家臣たちに恵まれていたからでしょう。さらに、家康公は支配地を広げていく度に、敵方であった武士たちもできるだけ仕官させ、その能力を生かすように心がけました。武田氏が織田・徳川の連合軍によって滅ぼされた後も、旧武田領では遺臣たちを中心とする一揆が頻発し、織田の代官たちは殺されたり逃亡したりと散々な目に合いました。しかし、家康公は徳川の家臣と武田遺臣を共に甲斐や信濃の代官に登用し、一揆を収めさせたのです。

このように家康公を支えたのは、「十六神将」「二十将」と呼ばれるような三河武士団だけではありませんでした。特に三河・遠江・駿河・甲斐・信濃の五カ国大名となつてからは、正確な総検地を行い、郷村社会を秩序立てた形に整えて行きます。この検地でも武田遺臣であった大久保長安を検地奉行に登用し、徳川家臣の伊奈忠次や小栗吉忠らと共にその重責を任せました。さらに江戸開幕後から駿府での大御所時代を通して、政治面や教育面でのブレーンとして、天海や金地院崇伝、林羅山など家臣団以外にも多くの人材に登用しました。

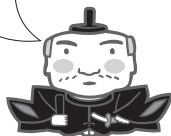
今回の検定では「家康公と偉業を支えた人々」をテーマに家康公の事績をたどりながら、家康公を援け平和社会実現の偉業を支えた多くの人々に目を向けて、さらに学びを深めていきたいと思ひます。

一目でわかる家康公の生涯

1. 生誕～少年期／竹千代の素顔

天文11 1542年	1	岡崎城で誕生。幼名・竹千代。父は松平八代広忠
天文16 1547年	6	今川氏の人質に。途中、戸田氏によって織田方に
天文18 1549年	8	安城城攻略。織田信広との人質交換で駿府へ
弘治元 1555年	14	元服。松平元信と名を改める
弘治2 1556年	15	岡崎に墓参で一時期帰国。忍従する家臣たち
弘治3 1557年	16	関口義弘の娘(後の築山殿)と結婚
永祿元 1558年	17	松平元康と改名。初陣。寺部城を攻略
永祿2 1559年	18	長男の誕生。後の岡崎三郎信康

私が誕生した頃の岡崎城は、尾張の織田氏と駿河の今川氏に挟まれ、危機的な状態だった。父の広忠は母の於大を離縁し、今川への忠節を示したが、私も人質として差し出されたのだ。しかし、駿府での人質生活は決して暗いものではなかった。のびのびと学問や武芸に励んだ。特に祖母の源応尼や今川義元、太原雪斎にはお世話になり、立派に元服することができた。そして関口義広の娘である築山殿と結婚したのだ。



2. 自立期／平和社 会へのまなざし

永祿3 1560年	19	桶狭間の合戦。大高城へ糧入れ
永祿4 1561年	20	織田信長と和睦。三河平定に着手
永祿5 1562年	21	信長と清洲同盟。上ノ郷鶴殿長照を攻略
永祿6 1563年	22	元康から家康に改名。三河一揆が起こる
永祿7 1564年	23	東三河の平定。酒井忠次城主に
永祿8 1565年	24	家臣団再編(三備の制)。旗本、三奉行など
永祿9 1566年	25	徳川姓を名乗る。従四位河守に叙任
永祿10 1567年	26	長男信康が信長の娘(徳姫)と結婚

桶狭間の合戦で大高城から大樹寺祖の墓の前で切腹登壇上人に「厭離言葉をいただき、たのだ。その後、盟を結び、三河の、一向一揆が起家臣も二分したが、できた。これ以し、酒井忠次や石なつて強い三河武ができたのだ。



敗北すると、私はに逃げ込んだ。先しようとしたが、穢土 欣求浄土の平和への志を立て織田信長と清洲同平定に乗り出したこってしまった。何とか収めること後は家臣団を再編川数正らが旗頭と士団

3. 浜松在城期／徳川家隆盛への試練

永祿11 1568年	27	信長が京に進出。家康公遠江進出(井伊谷)
永祿12 1569年	28	浜松城を拠点に。今川氏真、掛川城より退去
元亀元 1570年	29	姉川の合戦。本拠地を浜松城に。武田氏の侵攻
元亀3 1572年	31	三方ヶ原の合戦で、武田信玄に大敗する
天正3 1575年	34	長篠の合戦で、武田勝頼を破る
天正7 1579年	38	三男・秀忠誕生。築山・信康事件
天正9 1581年	40	武田方の高天神城奪還、遠江の平定
天正10 1582年	41	武田氏滅亡。駿河国を領有し三カ国大名に

三河を平定した私は、浜松城に拠点を移し、遠江の平定に乗り出した。しかし、これからが最も苦しい大変な時代になる。姉川の合戦に始まり、三方ヶ原の合戦、長篠の合戦と大きな戦が続いた。特に三方ヶ原では夏目吉信などの忠義の家臣を多く失ってしまった。これらの合戦での家臣たちの活躍を知っておいてほしいものだ。いずれも織田信長との同盟の上でのことだったが、何よりも長男・信康と正室の築山殿を失ったことは大きな悲しみだった。



4. 五力国大名の時代／領国経営の手腕

天正10 1582年	41	本能寺の変。「伊賀越え」を敢行
天正12 1584年	43	小牧・長久手の合戦。於義丸を秀吉の養子に
天正14 1586年	45	朝日姫との再婚。大政所岡崎に。秀吉と謁見、臣下の礼をとる。浜松城から駿府城に移る
天正17 1589年	48	五力国の総検地。七箇条の定書を発令
天正18 1590年	49	小田原の役。関東への移封、江戸城へ入る
文禄元 1592年	51	文禄の役(朝鮮出兵)。肥前名護屋城に帯陣
文禄2 1593年	52	江戸に帰着。藤原惺窩から朱子学を受講する

武田氏を滅ぼした信長だったが、**本能寺の変**で討ち死にしてしまった。私はわずかな家臣たちと**伊賀越え**を断行、茶屋四郎次郎らの活躍もあって、無事岡崎に戻ることができた。その後は秀吉との対立が激しくなり、**小牧・長久手の合戦**が起きたが、後に和睦した。甲斐・信濃を加えて**五力国**の大名となり、**総検地**を行って力を蓄えたが、**小田原征伐**の後、**関東に移封**され、江戸に入った。**朝鮮出兵**もあったが、この間じっくりと**朱子学**を学んだ。



5. 江戸開幕期／天下人として

慶長5 1600年	59	会津の戦い。上杉征伐。伏見城。関ヶ原の合戦
慶長6 1601年	60	街道に銀造。整備一伝馬制。伏見座設置、金銀貨幣鑄造。伏見で木版印刷を始める。朱印船貿易制度化
慶長8 1603年	62	征夷大将軍・右大臣に江戸に幕府を開く
慶長9 1604年	63	家光誕生。糸割符制の導入。輸入綿糸の独占
慶長10 1605年	64	朝鮮軍職。将国との国交回復。将を秀忠に譲る
慶長12 1607年	66	駿府で政治の実権を掌握。了以が富士川水路開削。林羅山が将軍の侍講

秀吉が死去する兵を取りやめたが、立が起こり**関ヶ原**の合戦へと発展した。この天下分け目の合戦に勝ち、私は政治の実権を握った。戦乱で乱れた社会を立て直**備＝伝馬制**を定めを鑄造したり、始めたのもこの時期**大將軍**となり**江戸**外国との貿易を盛度を定めるなど、を固めると**將軍職**秀忠に譲った。

と、直ちに朝鮮出豊臣家臣の間に対の合戦へと発展し日の合戦に勝ち、握った。戦乱で乱すため、**街道の整**たり、**金銀の貨幣**た**木版の印刷**を始だ。その後、**征夷**に**幕府**を開くと、んにし、**糸割符制**土台を



6. 大御所時代／太平の世の到来

慶長13 1608年	67	伏見の銀座を京都に移す
慶長14 1609年	68	通貨の交換基準を定める。オランダ商館を開設
慶長15 1610年	69	名古屋城の築城。スペインとの通商を始める
慶長17 1612年	71	禁教令を発令する
慶長19 1614年	73	方広寺鐘銘事件。大坂冬の陣勃発
慶長20 元和元 1615年	74	大坂夏の陣、豊臣氏滅亡。武家諸法度・禁中並公家諸法度の発令
元和2 1616年	75	太政大臣叙任。4月17日薨去。久能山に埋葬。位牌は岡崎・大樹寺に

私は太平の世の到来を願い続け、**駿府城に隠居**した後も、**大御所**として江戸の秀忠と共に政治を行った。鑄造した貨幣が安定して流通するよう努め、一方で**外国人顧問**を置いて貿易や宗教政策を進めた。ところが大坂城の豊臣秀頼のもとで不穏な動きが目立つようになり、最後は**大坂の陣**で豊臣氏を滅ぼす結果になった。こうして元号を**元和**と改めて、**武家諸法度・禁中並公家諸法度**を発令し、平和社会の実現を見て**75年の生涯**を終えたのである。



1. 生誕～少年期／竹千代の素顔

天文11年(1542)12月26日早暁、岡崎城の二の丸で元気な男の子が誕生しました。後の徳川家康公です。この頃の



於大肖像
(楞嚴寺蔵／刈谷市)

岡崎は尾張の織田氏と駿河の今川氏の勢力圏争いの中心にあり、周辺の松平一門も分裂の様相を呈していました。このような状況で織田・今川が直接衝突した第一次小豆坂合戦(岡崎市羽根町)が起き、岡崎城の松平広忠は、ますます窮地に立たされてしまったのです。

この年の暮れに於大との間に生まれた竹千代は、6歳になると今川義元のもとへ人質として送られることになりました。義元は松平広忠をしっかりとつなぎとめておきたかったのでしょう。しかし、駿府へ向かう途中、田原の戸田康光によって尾張の織田氏に送られてしまいます。2年後、義元は自分の軍師でもある太原雪斎を総大将として岡崎に派遣、織田方の安城城を攻め落とそうとしました。この時に小豆坂で再び織田軍と戦い(第二次小豆坂合戦)、

松平広忠 於大

広忠は刈谷城主水野忠政の娘である於大と結婚した。於大は信心深く、家康公の生誕に際し鳳来寺薬師堂に参籠したと伝わる。

今川義元

駿河・遠江の太守。広忠が放浪中に援助し、岡崎城主の座に復帰させた。

人質の竹千代に高等な教育を施し、松平当主を正式に継がせるなど、将来の今川家の重臣として厚遇した様子もうかがえる。

太原雪斎

今川義元の軍師。臨濟寺の住持でもある。義元が若い頃からの学問の師でもあり、兵学に優れている。竹千代も教えを受けた。

かろうじて勝利を収めます。この後、安城城を攻めて城代の織田信広(信長の庶兄)を捕縛、尾張に囚われていた竹千代との人質交換に成功しました。

改めて駿府へ送られた竹千代ですが、よく語られるような暗い人質生活のイメージはなく、祖母の源応尼(後の華陽院)の養育を受けて、屈託のない元氣いっぱいの少年としての記録が残されています。鳥居元忠との「百舌鳥事件」、義元や他の今川重臣の前での「放尿事件」、安倍川の石合戦の話などがそうです。



太原雪斎像(臨濟寺蔵／静岡市)

竹千代は14歳で元服、元信の名を与えられ、2年後には義元の姪にもあたった女性(後の築山殿)と結婚しました。そして元康と名を改めた家康公は17歳で初陣を果たしたのです。

源応尼

於大の母。駿府で竹千代の扶育にあたった。

鳥居元忠

家康公の生涯の側近でほとんどの戦で軍功を挙げる。関ヶ原の前哨戦である伏見城の攻防では、その守将として玉碎した。

鳥居忠吉

元忠の父。松平の当主が不在の間、岡崎城の奉行として守った。忠義に厚く、家康公初陣のために、蔵に米穀や武具、銭をためておいた話是有名。

関口義広(親永)

家康公の妻になる築山殿の父。義元の重臣。桶狭間の合戦後、娘婿の家康公が今川から離反したことで、今川氏真に切腹を命じられる。

2. 自立期／平和社会へのまなざし

永禄3年(1560)、今川義元の上洛の際に家康公も先鋒としてその列に加わり、大高城への兵糧入れを行いました。これが本多忠勝の初陣となりました。しかし、桶狭間の合戦で義元が討ち死すると、家康公は刈谷城主の水野信元の案内で、大樹寺に引き揚げてきました。ここで織田方の雑兵に囲まれた家康公は、先祖の墓の前で切腹しようと考えました。そのとき、登誉上人から、この戦乱の世の中から争いをなくし、平和な世の中を作ってほしいと「厭離穢土 欣求浄土」の言葉を贈られたのです。「厭離穢土 欣求浄土」を旗印にした家康公は、その志を胸に三河平定を進めていきました。

三河平定に着手する際、織田信長と和睦し、のちに清州同盟を結びますが、今川方の反感を買い、家康公の妻子を除いた人質は殺されてしまいます。そこで今川義元の甥にあたる鵜殿長照の



登誉上人像
(大樹寺蔵／岡崎市)

本多忠勝

徳川四天王の一人。大高城兵糧入れが初陣。生涯57度の戦で一度も怪我をしなかったという豪傑。蜻蛉切りという槍の使い手。

水野信元

母・於大の腹違いの兄。家康公の伯父にあたる。信長との同盟の立役者でもある。

登誉上人

大樹寺第13世住持。祖洞和尚

大樹寺に押し寄せた織田方の雑兵を、門の門を振り回して追い払ったと伝わる怪力僧。良伝。遠州大念仏を始めた僧でもある。

松井忠次

東条松平家の家老だったが、後に松平姓を許され、松井松平家の始祖となった。

いる上ノ郷城を松井忠次、久松俊勝らが攻め、その子二人を捕縛しました。その子供と家康公の妻子の人質交換が、石川数正の活躍によってなされました。その後、元康と名乗っていた家康公は、元の字を捨て、家康に改名しました。

三河平定を進める家康公でしたが、一向宗寺院への不入権侵害による徴税に反発した一向宗徒が一揆を起こしてしまいました。これには多くの家臣が一揆側に加わり、家康公へ刃を向けました。しかし、その中でも石川数正、本多広孝、本多忠勝、鳥居元忠などは改宗して、家康公の味方に付きました。大久保忠世ら大久保一族の奮戦もあり一揆を鎮めた家康公は、一揆側に加担した夏目吉信、蜂屋貞次、渡辺守綱たちを許します。恩を感じた家臣たちは、家康公のために身を粉にして尽くしました。一向一揆を経て、家康公は家臣団との絆をより強固なものにしていたのです。

西三河を平定した家康公は、東三河を平定するために吉田城や田原城などを攻め、吉田城には酒井忠次、田原城には本多広孝を城主としておき、家臣団の組織再編(三備の制)を行うことで、三河の安定を図りました。

久松俊勝

母・於大が再婚した相手。3人の子らが松平姓を許され、久松松平氏が興った。

酒井正親

家康公の家臣では最初の城持衆となった。西尾城主。

石川数正

家康公の側近として駿府の人質時代から仕える。信任が厚く、三河武士団の再編では西三河の旗頭となった。

酒井忠次

石川数正と並び家康公の側近として、信頼が厚かった。東三河の旗頭で徳川四天王筆頭。

本多広孝

家康公の自立期に活躍した。江戸開幕時に長男・康重が初代岡崎藩主となった。

家康三河統一期の家臣団			
家康	松平一族	松平親乗(大給)・松平直勝(佐々木) 松平信一(藤井)・松平重吉(能見) 松平家忠(吉良東城)	
	西三河旗頭 (石川數正)	城持衆 酒井正親(西尾) 酒井忠利・島田平蔵・鈴木信愛	
	家康直臣	内藤家長・平岩親吉・鈴木喜三郎	
	松平一族	松平忠正(桜井)・松平親俊(福釜) 松平伊忠(深溝)・松平清善(竹谷) 松平康忠(長沢)・松平景忠(五井)	
	東三河旗頭 (酒井忠次)	城持衆 本多広孝(田原) 鶴殿康孝・牧野康成・菅沼定盈・菅沼貞通	
	国衆	西郷正勝・奥平貞能・設楽貞通・戸田忠重	
	旗	旗本先手役	榊原康政・本多忠勝・大久保忠世 鳥居元忠・植村家存・大須賀康高など
		本	馬廻衆 渡辺守綱・服部正成
		諸奉行	三河三奉行 本多重次・天野康景・高力清長

「三河三奉行」とは、高力清長、本多作左衛門重次、天野三郎兵衛康景の三人で、「仏高力、鬼作左、どちへんなしの天野三兵」と謳われました。大きく性格の異なる三人を上手に民政に活用した、家康公の優れた人事の妙がうかがわれます。

3. 浜松在城期／徳川家隆盛への試練

三河一国を平定した家康公は、永禄11年(1568)、遠江(現在の静岡県西部)に攻め入り勢力拡大を目指します。今川側の城を次々に屈伏させて曳馬城(現在の浜松市)に入りました。

今川側にあった井伊谷の地は、徳川四天王の一人である井伊家の領地で、後に直政は家康公に見出されて徳川家に仕える事となります。遠江の地を配下に収めた家康公は、元亀元年(1570)、居城を岡



井伊直政像
(彦根城博物館蔵)

崎城から曳馬城に移して「浜松城」と名付けました。

浜松在城期の17年は、織田信長との関係を維持し続けたが故に、苦しい戦いの時期でもありました。信長は勢力を増すと、將軍・足利義昭や石山本願寺、武田信玄などの勢力によって包囲される危機的な状況に陥りました。この中で信長と共に戦い続けたことが徳川家を隆盛させることにつながったと言えます。

元亀元年(1570)6月の姉川の戦い(滋賀県長浜市)では、家康公は信長の要請を受けて参戦、徳川軍の活躍もあり浅井・朝倉連合軍に勝利します。

姉川の合戦の後、武田信玄が西上して三方ヶ原の台地で決戦となりました。これは信玄が石山本願寺と結び、信長を排除しようとしたために起きた合戦です。信長の同盟者である家康公を抑える必要があったのです。

三方ヶ原で、徳川軍は果敢に戦いましたが、圧倒的な兵数の武田軍について退却します。浜松城へと家康公を無事に帰すため、夏目吉信は家康公の身代わりになって討ち死にしました。城に帰った徳川軍は決死の覚悟でした。酒井忠次が城門を開けて篝火を大きく

井伊直政

徳川四天王の一人。井伊家の嫡子だったが、今川氏に追われ隠棲していた。後、家康公に見出され、小姓となる。

榊原康政

徳川四天王の一人。本多忠勝と同じ年であり、家康公を支え続けた武功の臣である。姉川の合戦では機動力を生かし、朝倉勢を退散させた。

本多忠勝

一言坂の合戦で「家康に過ぎたものが二つあり、唐の頭と本多平八」と謳われた。

夏目吉信

三河一向一揆では一揆方について戦ったが、家康公に赦され、三方ヶ原の合戦では家康公の身代わりとなって討ち死にした。

焚き、太鼓を激しく打ち鳴らしたという伝説は、この状況の中で生まれた物語です。日が暮れると大久保忠世は犀ヶ崖さいががけで武田軍を夜襲し、徳川軍の粘りを見せつけました。

若き家康公が武田信玄いんどに挑んだ三方ヶ原の戦いは、敗戦はしたものの家康公と三河武士の強さを、世に知らしめる事となったのです。

三方ヶ原の戦いに勝利した武田信玄が病死したことで、信長と家康公の状況は好転し始めます。後を継いだ息子の武田勝頼が、天正3年(1575)、三河に攻め入って徳川側の長篠城を包囲しました。長篠城主・奥平信昌の家臣・鳥居強右衛門すねえもんは、敵の包囲網くわうを潜り抜けて岡崎城まで駆けつけ、家康公に援軍を頼みました。

強右衛門は帰城直前に敵に捕まって殺されてしましますが、その忠義と意思の強さは今でも称えられています。



鳥居強右衛門磔図
(落合左平次旗指物
/東京大学史料室)

援軍に来た徳川・織田の連合軍は、家康公の家臣である酒井忠次の提案した「鷲ノ巢山砦たかてんじんじょう」を急襲することで、敵

酒井忠次

「酒井の太鼓」として有名な逸話だが、江戸時代の歌舞伎の題材として創作されたものとも…。

大久保忠世

犀ヶ崖で野営をしていた武田勢に夜討ちをかけ、大勢の兵や馬を崖下に落とした。一矢を報いたのである。

奥平信昌

作手奥平氏。徳川に味方し長篠城を守っていた。後に家康公の長女・亀姫と結婚する。

鳥居強右衛門

兵糧蔵を破られた長篠城の窮状を単身、城を抜け出し織田信長と家康公に伝えた。敵に捕えられたが、最後まで裏切ることなく、味方の目の前で処刑された。

の退路を断って武田軍を囲い込み、無理に攻めてくる武田勢に鉄砲を浴びせて圧勝しました。この戦では当時の最新兵器であった鉄砲が多く使われたため、武田軍の主力であった騎馬隊が壊滅しました。武田氏はこの敗戦から衰退の一途をたどることとなります。

家康公の後継者として岡崎城主を任されていた岡崎三郎信康は、武芸に優れた将来を期待されました。しかし、天正7年(1579)、家康公と同盟関係にあった織田信長が、信康と妻の築山殿の処断を命じてきたのです。



築山殿

(西来院蔵/浜松市)

家康公は妻子を助けようと努力しますが、築山殿は「富塚」(浜松市)という地で自害、信康も二俣城(浜松市)で切腹に至りました。信康を長く支えた服部半蔵は、切腹の介錯をするはずでしたが、悲しみのあまり刀を下せませんでした。家康公の妻と子は徳川家を守るために自らの命を犠牲にしたのです。

天正9年(1581)、家康公は長年、武田氏との交戦が繰り返された高天神城をついに落城させました。高天神城で

酒井忠次

長篠の合戦は大量の鉄砲を使用したことで有名だが、忠次の進言によって鷲ノ巢山砦を落としたことで勝敗が決まったと言われている。

築山殿

家康公の正妻。悪女として描かれているが、近年研究では否定されている。西来院(浜松市)に葬られた。

岡崎三郎信康

家康公の長男。妻は信長の娘・徳姫。武田氏との内通を疑われたが、その事実は認められない。

服部半蔵正成

徳川十六神将の一人。鬼半蔵の異名を持つ。

平岩親吉

家康公と同年で人質時代から従う。信康が切腹

は家康公の家臣で、捕虜として牢に入れられ、7年間も家康公を待ち続けた忠義の臣・大河内政局が助けられました。天正10年(1582)、家康公はついに駿府に入城し、さらに武田勝頼を追いましたが、勝頼は天目山(山梨県)で自害してしまいます。

若き家康公が、遠州進出以来、ずっと宿敵として戦い続けてきた武田氏がここに滅亡しました。危機的な「信長包囲網」の中で、その関係を維持し続けたことで勝ち得た結果と言えるでしょう。家康公は武田の遺臣達を多く取り立て、徳川家臣団はさらに強く、厚みを増していきました。この時点で家康公は、三河、遠江、駿河、三カ国の大名になりました。

この時期、人間味豊かな家康公に成長していく陰に西郷局さいごうのつぼねがいます。築山・信康事件の年に三男・秀忠を生んで、愛情を注ぎます。彼女自身、視力が悪かったことから、目の不自由な人々への施策にも奔走したと伝わります。



西郷局(お愛)肖像画
(宝台院/静岡市)

を命じられた際、もりやく傅役として、自分の首と引き換えに助命嘆願をするも叶わず、自ら蟄居謹慎。後に家康公に再三請われて復帰し、家康公九男・義直の傅役、そして、尾張藩付家老として犬山城を領し、尾張徳川家の基礎固めに尽くした。

大河内政局

「まさもと」と読む。家康公の祖母・源応尼が、実家から連れてきたとされる。高天神城から救出された後、小牧・長久手の合戦で討ち死にした。

4. 五カ国大名の時代 / 領国経営の手腕

天正10年(1582)、武田氏を滅ぼした織田信長でしたが、家臣の明智光秀によって京都の本能寺で殺害されてしまいました。信長の接待を受けた後、京から堺に移った家康公は、京で呉服商を営む茶屋四郎次郎清延きよのぶから本能寺の報告を受け、急ぎ岡崎まで帰ることとしました。茶屋清延はもともと中嶋姓を名乗る三河武士で、京では徳川の窓口としての活動をしていました。堺を出発した家康公はわずかな供で伊賀の山中を越え、伊勢から船で大浜(現在の碧南市)に上陸したと伝えられます。この間、服部半蔵が伊賀の国衆を従え家康公を助けたとも、茶屋清延が用意した金銭を使い、危機を脱したとも言われますが、家康公の大きな苦難として後世に伝えられました。

信長の死後は、山崎の合戦で明智光秀を破った羽柴秀吉に権力が集中するようになります。特に信長の後継者を決定する「清洲会議」では、信長の嫡孫ちやくそんである三法師を推挙、信長の三男である信孝を推す柴田勝家を封じ込めました。さらに家臣団の所領分配でも旧明智領の丹波国に山城国を加えて家中第一の地位に登りつめたのです。この秀

茶屋四郎次郎清延ももとは岡崎出身の三河武士であり、三方ヶ原の合戦などに従軍していた。京都では、徳川氏の出先機関のような役割を果たしていたとされる。

服部半蔵正成

伊賀越えでは、伊賀同心を集め家康公を守ったと伝えられている。

※伊賀越えに随行した主な家臣たち

石川数正

酒井忠次

本多忠勝

榊原康政

大久保忠憐

井伊直政

渡辺半蔵守綱

服部半蔵正成

など、30数名

織田信雄

信長の二男。秀吉が台頭すると、盛んに家康公に

吉の台頭に危機感を抱いた勝家でしたが、賤ヶ岳の合戦で秀吉に敗北し、その後滅亡。さらに共に挙兵した三男信孝も知多郡の野間で切腹させられ、信長の後継者としての秀吉の地位は不動のものとなりました。

この秀吉の動きに対抗するため、信長二男の信雄は家康公に急接近します。家康公も北条氏直に二女の督姫を嫁がせ、縁戚関係を結ぶことで秀吉に圧力をかけたのです。その上で家康公は信雄と同盟を結び秀吉に対抗する構えを見せました。天正12年(1584)3月、秀吉方の将・池田恒興が犬山城を攻略すると、酒井忠次が森長可の守る羽黒城を攻め落とし、「小牧・長久手の合戦」が始まりました。家康公はその先の小牧山城に本陣を置くと、秀吉はおよそ7万の軍勢で小牧原に押出し、楽田に砦を構えて小牧山と対峙したのです。

膠着状況のなか、三好秀次(後の豊臣秀次)や池田恒興、森長可らによって河奇襲作戦が断行さ



神原康政像
(東京国立博物館蔵)

接近した。後に秀吉と和睦する。

督姫

家康公の二女。西郡局との間に生まれた。北条氏直に嫁ぐが、小田原の陣の際に離縁。後に池田輝政に嫁ぐ。

酒井忠次

羽黒の戦いで機先を制し、家康公が小牧山城へ入るのを援けた。

神原康政

秀吉を怒らせた檄文を書いたことでも有名である。大須賀康高は、義父にあたる。

井伊直政

長久手の合戦では、赤備隊としてデビューした。旧武田遺臣の朱具足を統一して使用したため、このように呼ばれるようになった。

れましたが、事前に情報を察知した家康公は、榊原康政や大須賀康高(白山林の戦い)、井伊直政らの活躍もあり長久手でこれらを撃ち破りました。

長久手の戦いの際、酒井忠次や石川数正、本多忠勝などは小牧山の守備を任されたのですが、忠勝は秀吉本隊が家康公の後を追ったという知らせを受けると僅か五百名ほどの兵を引き連れ、秀吉本隊に近づいて威嚇しました。

「あれほどの武将は殺してはならん」

秀吉が鉄砲を撃とうとした部下を嗜めたという逸話は有名です。

長久手の戦い後は目立った動きもなく、秀吉との対決は信雄が単独で講和を結んだことで終結しました。家康公の実力を見せつけられた秀吉は、これまでの敵対関係からの方向転換をはかります。家康公の二男・於義丸(後の結城秀康)を養子に迎え、さらに石川数正を調略して家臣に迎えます(数正の岡崎出奔については諸説があり、「裏切り行為」と断定することはできません)。また、秀吉は妹



本多忠勝像
(良玄寺蔵/大多喜町)

本多忠勝

僅かな兵で数万の兵を率いる秀吉本隊を威嚇した。秀吉があっばれと認めたという。

於義丸

後の結城秀康。家康公の二男として浜松城下で誕生した。当初は家康公から遠ざけられていたが、信康の計らいで対面できたという。秀吉との和睦の条件で、養子に出された。

石川数正

家康公の側近として、幼い頃から支え続けてきたが、秀吉の元へ出奔した。その原因や実態についてはなぞの部分が多い。

本多重次

家康公を上洛させるため、秀吉の母・大政所が人質として岡崎

の朝日姫を家康公に嫁がせ、それでも動かないとみると母の大政所おおまんどころを岡崎まで向かわせました。その結果、天正14年(1586)には家康公もついに大坂城で秀吉えっげんと謁見、臣下の礼をとったのです。この年、家康公は甲信経営に専念するためもあり、居城を浜松から駿府に移しました。

小牧・長久手に登場しない武将たちがいます。大久保忠世、鳥居元忠、平岩親吉の三武将は、信長亡き後に起きた「天正壬午の乱」(甲斐・信濃の領有を巡る徳川・上杉・北条などの争い)を取めた家康公が、各地域を治める奉行として配置したからです。信州惣奉行そうぶに大久保忠世を、甲斐国郡代には平岩親吉を、そして鳥居元忠つるぐんやを都留郡谷村城主として甲信の鎮撫ちんぶに当たらせていました。

鳥居元忠像
(鳥居家中興譜より)



平岩親吉像
(平田院蔵/名古屋市)



に下向した際、大政所の居館に柴を積み上げ、万一の時には火を掛けると秀吉を牽制けんせいし、家康公上洛時の無事を計った。

※通称 左衛門

大久保忠世

信州惣奉行として、小諸城に入り旧武田領を治めた。

平岩親吉

甲斐国郡代として甲府城を築き、旧武田遺臣を鎮撫した。

鳥居元忠

都留郡谷村城主として旧武田領を治めさせた。

大久保忠世像
(小田原城蔵/小田原市)



秀吉と主従の関係を結んだ家康公でしたが、五カ国大名としての領国経営には大変多くの力を注ぎました。中でも「五カ国総検地」は農民たちや在地領主たちの石高こくたかを調べ、様々な条件を考慮して貢租こうそを決定した重要な政策の一つです。「七箇条定書」によって決定された農民政策は、これまで不安定だった郷村社会しやうあくを掌握し、農民たちが農業に専念できる仕組みとして優れたものでした。この仕事にあたったのが、三河譜代の家臣である伊奈忠次や小栗吉忠、武田氏の遺臣である大久保長安などです。

一方、秀吉は「惣無事令」(絶対に戦をしない命令)を発令し、全国の大名を掌握しようとしたのですが、小田原の北条氏はそれに従いませんでした。天正18年(1590)、秀吉は家康公を先鋒として小田原征伐を行い、北条氏を滅ぼします。そしてこの時、家康公に関東六カ国への移封を命じたのです。故郷の三河や遠江、駿河を離れることは辛いことでしたが、8月1日に江戸入りを果たしました。このことを「八朔」と呼び、現在でも東京や周辺のいくつかの地で祝いの祭りが催されています。

江戸に入った家康公は、早速関東の

伊奈忠次

西尾市の小嶋城に生まれる。一時期出奔するが、伊賀越えて功を挙げ駿・遠・三の代官となり検地などに携わる。

小栗吉忠

岡崎市筒針城に生まれる。家康公青年期より仕え、遠州奉行となった。後、伊奈忠次らと検地奉行となり活躍した。

大久保長安

武田遺臣であるが、歌舞音曲に優れ徳川に仕える。検地奉行を始め、金山の運営などを任せられ、莫大な富をもたらした。

※小田原征伐

徳川家も豊臣配下の一大名として参戦。徳川の譜代家臣たちは豊臣家臣の与力として出陣した。

経営に乗り出しますが、やはり人々の人心掌握が第一と考え、新領主となった家臣たちに善政を施すよう厳命しました。主な家臣の配置先は次の図に表します。また江戸の町づくりにも成果を取めた青山忠成の屋敷が置かれた地が「青山」に、内藤清成の屋敷場所に甲州街道を引き入れ、新たに宿場を置いたことから、地名も「内藤新宿」に、甲州街道に続く江戸城の西門前に、將軍の警護を任された服部半蔵と同心たちの屋敷が置かれたことから「半蔵門」と名付けられるなど、現在でも東京には三河武士たちの名がそのまま地名や施設名となって残されています。

また、戦乱を終わらせ秩序ある社会を構築するため、家臣たちへの教育の必要性を認識した家康公は、江戸城に儒学者の藤原惺窩を招き、「貞観政要」などを講義させます。家康公は藤原惺窩に徳川家の侍講となるよう要請しましたが、彼はそれを断り、代わりに一番弟子の林羅山を推薦、家康公もそれを快諾したのです。



藤原惺窩像
（『先哲像伝』より）

青山忠成

岡崎市百々で生誕している。家康公の信任厚く、秀忠の傅役を務めた。江戸町奉行として原宿から赤坂にかけて屋敷地があり、青山の地名が付いた。

内藤清成

岡崎生まれ。内藤家の養子となり、秀忠の傅役となる。関東総奉行、江戸町奉行などを務めた。屋敷地が甲州街道の新宿になり、地名となった。

藤原惺窩

冷泉家の三男として兵庫県三木市に生まれた。禅門で儒教を学び、朱子学や陽明学など幅広く取り入れた学問を行った。弟子に林羅山、石川丈山らがいる。家康公より20歳ほど若い。



関東に配された有力家臣たち

地名	石高	家臣	地名	石高	家臣
高崎	12	井伊直政	白井	3.3	本多康重
館林	10	榊原康政	小幡	3	奥平信貞
大多喜	10	本多忠勝	白井	3	酒井家次
小田原	4.5	大久保忠世	久留里	3	大須賀忠政
矢作	4	鳥居元忠	忍	1	松平家忠
厩橋	3.3	平岩親吉	甘縄	1	本多正信
			※結城	10	結城秀康

一方で天下人となった大坂城の豊臣秀吉は、文禄元年(1592)と慶長2年(1597)の2度にわたり、明国まで領土を拡大すべく朝鮮への出兵を行い、慶長3年(1598)、秀吉が死去するまで戦いが続きました。

5. 江戸開幕期／天下人として

秀吉の死後、加藤清正らの「武断派」と石田三成らの「吏僚派」による家臣団の内部分裂が引き金となり、家康公が大坂城出仕を拒んだ上杉景勝討伐に向けて会津に出陣した隙に反家康を掲げた西軍が挙兵します。その時、留守になった伏見城を僅か1800の兵で守備したのが、鳥居元忠、松平家忠、内藤家長らの譜代家臣たちでした。数万という西軍の大軍に攻囲されましたが、籠城戦を戦い抜き10日にわたって西軍をくぎ付けにした後に玉砕したのです。

伏見城での元忠たちの非業の死が報告されると、家康公は小山(栃木県)で評定を開き、反転して三成率いる西軍を攻めることにしました。この時に豊臣恩顧の福島正則、細川忠興、黒田長政らの武将たちは進んで三成打倒の声を挙げたと言います。慶長5年(1600)9月、天下分け目の合戦と呼ばれる

※五大老

徳川家康
前田利家
毛利輝元
宇喜多秀家
上杉景勝

※五奉行

石田三成
増田長盛
前田玄以
浅野長政
長束正家

加藤清正

秀吉子飼いの将。朝鮮出兵での単独行動を三成から訴えられ、秀吉の勘気を蒙った。秀吉の死後、三成との対立が決定的となり、**福島正則**と共に家康公を頼って関ヶ原の合戦を誘発した。

松平家忠

元忠と共に伏見城で戦った。「家忠日記」の著者でもある。

内藤家長

元忠と共に伏見

関ヶ原の合戦が起きました。東軍では反三成の豊臣大名をはじめ、家康本隊では本多忠勝、井伊直政、家康公四男の忠吉らが活躍し、最後は小早川秀秋らの内応も



松平忠吉像
(性高院蔵／名古屋市)

あって1日で勝負が決着しました。ただ、中山道を進んだ秀忠を大将とする徳川本隊は、上田城の真田昌幸に足止めをされて本戦に遅参してしまいました。家康公の怒りを買うことになりましたが、榊原康政の仲裁によって許されたと伝わります。

関ヶ原後には本多忠勝、榊原康政、井伊直政によって全国の大名家配置が策定され、家康公による天下の平定作業が進められました。

家康公が江戸に幕府を開く前までに、多くの施策が実行されています。特に伊奈忠次、彦坂元正、大久保長安が中心となり、主要な街道に伝馬制を確立しました。また、大久保長安は金山奉行も務め、金や銀の交換価値を定めて通貨の安定を図ったのです。

さらに京都所司代を置き、板倉勝重

城で戦った。弓の名手としても知られ、家康公と共に数々の戦いで武功を挙げた。

※東軍に属した 主な豊臣大名

福島正則
細川忠興
黒田長政
田中吉政

山内一豊

家康公に掛川城を明け渡した。

松平忠吉

家康公の四男。母は西郷の局。義父の井伊直政と共に、関ヶ原一番槍の功を挙げた。名古屋城主となるが早世する。

彦坂元正

今川遺臣。東海道整備で代官として活躍。「伝馬定書」を発給するなど具体的な伝馬制度を確立した功労者。

に朝廷とのパイプ役を担わせました。また武士たちへの教育の必要性から木版印刷による出版



板倉勝重像
(長野県坂城町蔵)

事業を開始、海外との交易も盛んにするため朱印船貿易も活発に行ったのです。こういった諸施策は、これまでの武将ではなく、実務に長けた官僚ともいえる武士たちを登用することで実現していきました。本多正信・正純父子、土井利勝、大久保忠隣などの武士たちです。

慶長8年(1603)、家康公は征夷大將軍に任じられ江戸に幕府を開きました。この年、秀吉との生前の約束どおり、孫の千姫を大坂城の秀頼の元へ嫁がせます。翌年には秀忠に念願の男子が誕生し(後の家光)、また懸案であった朝鮮国との国交を回復させると慶長10年(1605)には將軍職を秀忠に譲ってしまいました。これは徳川氏による政権が続くことを知らしめたものであり、後継を巡っての争いなどを避けるためであったとも考えられます。そして慶長12年(1607)には駿府城を修築し、自らは隠居として江戸から移ります。しか

板倉勝重

岡崎の小美で生まれる。京都所司代。主に幕府と朝廷の取り次ぎ役を務めた。

本多正信

三河国出身。一向一揆では家康公に抗し、流浪をするが、後、再び仕官してからは家康公の右腕として政治手腕を発揮した。長男の正純も重用されたが、後に失脚させられた。

土井利勝

水野信元の三男(諸説あり)。土井家の養子となり、家康公からの寵愛を受ける。二代将軍・秀忠の老中となり、行政手腕を発揮した。

大久保忠隣

大久保忠世の長男。秀忠の側近として幕閣で手腕を発揮した。大久保長安事件に連座し失脚。近江で死去。

し実際には江戸の幕府と密接な連絡を取り、大御所として実権を握り続けました。

「家康と思って仕えてくれ」

幕府は徳川宗家を補佐する目的で尾張・紀州・水戸に「御三家」を創設します。そして、それぞれに家康公の直臣を付家老として近侍させます。「殿の直臣として最後まで仕えたい」と願ったようですが、「この家康と思って仕えてほしい」という意向を汲み、遠くから家康公を支えることになったのです。

- <尾張家> 平岩親吉(尾張犬山)
※無嗣により一代で除封
成瀬正成(尾張犬山)
竹腰正信(美濃今尾)
- <紀伊家> 安藤直次(紀伊田辺)
水野重央(紀伊新宮)
- <水戸家> 中山信吉(水戸松岡)

6. 大御所時代／太平の世の到来

駿府での大御所としての政務には、多くの優秀なブレーンがいました。流通・貨幣政策では金山奉行、勘定奉行を務めた大久保長安、外交顧問としてイギリス人のウィリアム・アダムス(三浦按針)、オランダ人のヤン・ヨーステンなどがよく知られています。ま

千姫

秀忠の長女。徳川と豊臣を結ぶ架け橋としての役割を果たした。大坂落城後は姫路藩の本多忠刻に再嫁する。

本多正純

家康公が駿府に移ってからは、父の正信に代わり側近として活躍した。大坂の陣で外堀を埋めることを進言したとされる。

南光坊天海

もともとは比叡山の僧であったが、焼き打ちを逃れて甲斐国に、さらに川越の喜多院に赴いた。ここで家康公に望まれて幕政顧問役に就任。寛永寺を創建、108歳という高齢で死去。

林羅山

家康公隠居の年に幕府の侍講となり、朱子学を講ずる。家康公の信望厚く、幕政にも参画する。

た、自らの政策の助言者として、天海僧正こん ちん さいしゅう ぜんや金地院崇伝(本光国師)を傍に置き、江戸の町づくりや京都・大坂の政策などを行いました。

通貨については、金1両を銀50匁もんめ、銭4貫文と統一し、安定した経済社会の基盤を築きました。これは秀吉が実現できなかったことでもあり、同



大久保長安像
(大安寺蔵/佐渡市)

じ「天下統一」といっても、豊臣政権のそれと大きく異なるところです。この政策に大きく関わったのが大久保長安でした。もともと武田遺臣であった長安は、五カ国総検地を実施した際に力を発揮し、以後、家康の経済政策の右腕として金山の開発、勘定奉行、街道整備などにもその力を発揮したのです。しかし、幕閣内における本多正信らとの対立が生じ、死後罰せられるという異常な事態を生じさせてしまいました。

外国との関係については、家康公が鎖国政策を始めたというような大きな誤解は解いておかなければなりません。特に東南アジアの諸国に対しては、関ヶ原合戦翌年の慶長6年(1601)から

大久保長安事件
死後、私的な蓄財をしたという咎で斬首された。長安は、大久保忠憐や石川康長(松本藩主)らと関係があり、彼らも連座させられ処罰された。**ウィリアム・アダムス(三浦按針)**
オランダ船リーフデ号のイギリス人航海士。豊後で難破し、大坂で処刑されることを家康公に救われ、外交の顧問となった。**ヤン・ヨーステン**
アダムスと共に家康公に信任された。日本人の女性を妻とした。屋敷地が「八重洲」である。**角倉了以**
朱印船貿易を行い、また琵琶湖の疏水そすいを開削するなど「水運の父」と呼ばれた。家康公の信任も厚かった。

朱印船貿易を進めており、オランダ船リーフデ号の難破によって召し抱えられたイギリス人航海士ウィリアム・アダムス(三浦按針)やオランダ人航海士のヤン・ヨーステンを外交顧問として、外国との取引を盛んにしようと試みました。京都の豪商・角倉了以すみののくりようい、茶屋四郎次郎や大坂の末吉孫左衛門を始め、多くの貿易家が海を渡りました。そして長崎の平戸にはオランダ商館を開設し、慶長15年(1610)にはスペインとも通商を始めたのです。

キリシタン政策については、幕府の統制下に入らない宗教として考えられ、禁教令に踏み込まざるを得ませんでした。高山右近などが追放されましたが、京都所司代の板倉勝重は柔軟な姿勢で臨み、大きな事件が勃発することはなかったのです。この禁教令を立案し書面に仕立てたのが金地院崇伝です。崇伝は家康公の外交を司る僧として活躍し、駿府の大御所政治を援けました。

太平の世の構築を目指し、様々な施策を講じてきた家康公でしたが、関ヶ



ウィリアム・アダムス像
(横須賀市自然・人文博物館蔵)

茶屋四郎次郎清次
伊賀越えの際に家康公を援けたのは父の清延である。清次は三代目であるが、朱印船貿易を行い代官としての役割も負った。「鯛の天ぶら事件」はこの清次の時である。

金地院崇伝(本光国師)

家康公の最も信頼するブレーンとして、常に傍にあり助言を行ったり、実際の政務を担当した。禁教令や方広寺鐘銘事件などで、重要な局面で活躍した。

片桐且元

大坂城の秀頼と家康公の間に入り、両家の融和を図った。しかし、城内の反徳川派の重臣に疎まれ、遂には逆心を問われて城を退去、大坂の陣では徳川方として戦った。

原の合戦以来、取り潰された豊臣方の浪人たちが大坂城に集結、秀吉の遺児・秀頼を押し立て、慶長19年(1614)に大坂の陣が起きます。方広寺の鐘銘事件が



金地院崇伝
(金地院蔵/京都市)

発端だと言われていますが、これは難癖を付けたのではなく、崇伝が豊臣方の片桐且元に浪人集結の真意を糺すためのきっかけにしたというのが本意でしょう。大坂冬の陣、夏の陣が起きた結果、秀頼と淀君は自刃し、豊臣氏は完全に滅んでしまいました。家康公は二代将軍である秀忠と共に、直ちに一国一城令を出し大名たちの統制に取りかかりました。そしてやはり崇伝の起草による「武家諸法度」、「禁中並公家諸法度」を発令、太平の世の基盤を固めたのです。

戦乱の世の終焉を見届け、平和の始まりを意味する元和と年号を改めた家康公は、その翌年の4月17日、駿府城で75年の生涯を終えました。枕もとで崇伝が書き留めた「遺言」が『本光国師日記』に残されています。その一節に

※大坂の陣 松平忠明

奥平信昌の四男、家康公は外祖父にあたる。大坂の陣で功を挙げ、大坂城主に。後、大和郡山、姫路城主。幕府の参与として重きをなす。「道頓堀」を開削した。

真田信之

真田信繁(幸村)の実兄。大坂城に籠城する弟の説得をしたが、信繁はそのまま戦って討ち死にした。妻は本多忠勝の娘・小松姫。

※本光国師日記

家康公の大御所時代の記録がつぶさに記されている。遺言についても、この時の家康公の言葉であると考えられる。

次のような文言があります。

「天下は一人の天下に非ず、天下は天下の天下なり」

たとえ将軍と言えども、人々の暮らしを守ることができなければ、いつでもだれでも取って代わってよい、という内容です。家康公の覚悟の程が表れています。

最後に一言——終わりに代えて

秀吉が関白に登り詰めた頃、諸国の大名を大坂城に呼び寄せた席で、自分の宝自慢をさせました。

「皆々、各々が自慢の宝があるものじゃ。さて、家康殿のご自慢はいかようなものか、お教え下さるかな」

「はてさて、ご存知のように、それがしは三河の片田舎の生まれですので、何も珍しいものは持っておりません。ただ、それがしのためには、火の中、水の中へ飛び入り、命を惜しまない武士を五百騎ほど配下にしております。これこそ、この家康にとって、第一の宝物と思っております」

家康公の答えに秀吉も赤面したということです。『東照宮御実紀』に記されたこの一文こそが、家康公と彼を支えた家臣団たちの関係をもっともよく表したものでしょう。

本書で記した「人々」は五百人には到底及びませんが、家康公が「命令者」としての将ではなく、家臣たちの意見に耳を傾ける「決定者」であったことを読み取っていただければ幸いです。これからの時代を生きていく上で、本書が少しでもお役に立つことを願ってやみません。





徳川家康木像(大樹寺蔵／岡崎市)

第2回「家康公検定」副読本
「家康公と偉業を支えた人々」
～家臣団を中心に～

発行日 平成26年(2014)6月16日

編集 おかざき塾

発行者 岡崎市 岡崎商工会議所
浜松市 浜松商工会議所
静岡市 静岡商工会議所



家康公
四百年
祭

○ 試験日 平成**26**年**9**月**21**日**日**
10:30～（試験時間90分）

○ 試験会場

岡崎会場	岡崎商工会議所
浜松会場	浜松商工会議所
静岡会場	静岡商工会議所

静岡事務所

